

## ●松野哲也先生の「ブログ」

プロポリスの有用成分を同定した第一人者

「松野哲也」先生の最近(平成 26 年 10 月)のブログから

### <松野哲也先生のプロフィール>

1942 年横浜市生まれ、東京大学理学部生物化学科卒業。同大学院博士課程修了。国立予防衛生研究所室長(インターフェロンの作用機作、ウイルス・化学発ガン、ガン胎児性タンパク質、腫瘍細胞のエネルギー代謝機構、抗ガン物質探索などの基礎医学研究に従事)。1996 年渡米(コロンビア大学ガン研究センター教授)。現在、”Laboratory of Noetic Science” 主宰。

先生は、1994 年 3 月出版の「プロポリスーその薬効を探る」中で、プロポリスに含まれる有用成分の同定結果を発表されています。

以下「松野哲也の“がんは誰が治すのか”」(ブログ)掲載記事の中から、数カ所を抜粋いたしました。プロポリスについて詳細を検索されたい方は是非「松野哲也」で検索し、多くの書籍をお求めになられ、研鑽を深められますようお勧めいたします。

### <プロポリスに含まれる抗ガン物質(1)>より。

『1990 年 5 月の連休のことです。私は人のいないひっそりとした研究室で顕微鏡に向かい、プラスチックシャーレの中で培養したガン細胞をじっと観察していました。前日プロポリス抽出液を加えて培養したヒト肝臓ガン細胞は増殖が抑えられ、すでに丸くなって死滅していました。ヒトの子宮頸ガン、肺ガン、腎臓ガン細胞も同じように死滅したのです。

プロポリスにはガン細胞を死滅させる物質が含まれているに違いない!

私は抗ガン物質を求めて、色々な天然物質の薬理作用を調べていたのです。当時、プロポリスは得体の知れない健康食品でした。私はそれに多彩な植物成分が含まれていると思ったので、実験に使ったにすぎませんでした。この現実遭遇して、とにかく、ガン細胞を死滅させる成分を単離する仕事を始めることにしたのです。(中略)

この作業は比較的早く進み、三種類の化合物の構造が明らかとなりました。

この中の 1 つの物質の正体(他は、カフェイン酸フェネチル・エステルとケルセチン)は、「クレロダン系ジテルペン」という化合物の一員で、これまでに知られていない新しい物質でした。

PM-1 と名付けられました。(P はプロポリス、M は松野の頭文字です。) 翌年 1991 年の日本癌学会で発表し注目されました。

PM-1 は、DMBA という強力な発癌剤をマウスの皮膚に塗布すると皮膚ガンができますが、それを抑制しました。

一般の抗ガン剤だと皮膚に障害がでます。毛も抜けたりします。しかし、PM-1 を塗布したマウスの皮膚は障害を受けるどころか、むしろ艶があり、動物も元気でした。』

#### <プロポリスの飲み方(4)>より。

『 前文略。

\*ある若い男性は、ウイスキーグラスにプロポリス液をいれ、氷を加えてオンザロックにし、鼻歌交じりに楽しそうに踊りながらのんでいました。程なくして脳下垂体腫瘍は消失したのです。

\*PSA が 1000 を超し、骨にも転移のある前立腺ガンの方には、先に述べましたように徹底的に楽しみを追求し、感動するようにお勧めしました。彼はスキーを趣味とし、登山をしたり旅行をしたりされ、楽しみを追究されました。アフリカで野生動物を見られたときは、とても楽しく心の底から感動されたそうです。

現在、彼の PSA 値は 0.02 を維持しています。(通常<3.5 が正常です。)

中文略。

通常、症状があるときプロポリス液は、一口に口に含む量(約 30 ミリリットル)を症状に応じて一日 2, 3 回飲まれるのが一応の目安と考えています。多い分に問題はありませぬ。ジュース類や乳酸飲料等を加えて飲んで頂いても結構です。』

#### <「ガンの処方箋」(3) ガンの標準化学療法>より。

『 前文略。

2004 年、フランスのある製薬会社から、進行した前立腺ガンに対して

新薬の抗ガン剤で治療を行うと死亡の危険が大幅に低下する旨の報告がありました。

前立腺ガンは抗ガン剤が効きにくいガンの一つとされており、これまで延命効果の例はなかっただけに、「画期的な効果」と強調されています。この試験の責任者の「我々はついに前立腺ガンの患者さんに化学療法(抗ガン剤治療)を提供できるようになりました。」「生存率が大幅に上昇しました」といったコメントも同報告書につけられています。

死亡リスクが 20%低下と聞けば、誰もそれだけ多くの方が救命されるようになったと思うでしょう。

ところが、真実は次のようなものだったのです。

約 800 人を対象にした臨床試験では、この抗ガン剤を使った患者の平均生存期間は 18ヶ月で、従来の治療の 16ヶ月よりも 2ヶ月長かっただけでした。

治療開始から 1年半から 2年くらいの間は、この抗ガン剤で治療した方が従来の方法より生存率は 20%程度高いように見えますが、生存期間で見るとその差は僅か 2ヶ月にしか過ぎないのです。そして治療開始から 3年を過ぎると両者のグラフは交わり、ともに生存者はゼロに近づいていたのです。』

中文略。

『「寛解」といっても、ガン細胞の数は百分の一から千分の一に減り、症状が安定するにすぎません。約 10 億個以上のガン細胞は残っているのです。これが消えて治るのは身体の抗腫瘍免疫態勢が整ったためです。私は手術でも、抗ガン剤でも、放射線治療でも、ガンは小さくなる、すなわちガン細胞の数が減少するだけであり、治るのは本人の自己治癒力によるものと考えています。』

後文略。

(注)先生のブログは大変に示唆に富んだモノであり、参考になります。是非「松野哲也」で検索し、全文熟読されますことをお薦め申し上げます。